

No.6

株式会社 原田瓦工業

代表取締役 **原田 誠**

第1期生



ルーツ

原田瓦工業は、創業からこれまで、取り扱うメインの商材を一切変えていない。「瓦一筋百三十年」。ホームページのキャッチコピーからは、長年地域の業界をリードしてきた矜持さえ感じられる。そんな超老舗企業の5代目が原田さんだ。原田さんは地元の高校を卒業後、県外の大学で経営工学を専攻した。人間工学や空間デザインを学び、クリエイティブな領域にも長けている。そんな自身の特性を活かし、老舗企業の中で挑戦を続ける、原田誠さんを取材した。

## 真面目で誠実な職人集団

原田瓦工業は従業員数14名。そのほとんどが技能士、工事技士の有資格者で構成される職人集団だ。「真面目で丁寧な仕事をする職人が多く、顧客満足度も高いと感じている。」原田瓦工業の職人たちは、修繕の仕事にも決して手を抜かない。そんな職人たちの姿勢が評価されて、神社仏閣や由緒ある建物等の難しい仕事も任されている。

そんな原田瓦工業に、最近20代の若い職人2名が入社した。「真面目に一生懸命頑張ってくれていて、仕事が忙しい時は積極的に休日出勤してくれる良い子たちなんです。」原田さんは嬉しそうに語ってくれた。経営者の全幅の信頼に応え、小さな仕事にも真面目に一生懸命働く職人集団。それはいつしか原田瓦工業の「風土」となり、次世代にも着実に伝わっている。

## 時代の変遷と瓦離れ

しつかりと事業の土台が形成され、盤石に見える原田瓦工業だが、業界を取り巻く環境は決して楽観視できるものではない。かつて新築住宅の大部分を占めていた瓦屋根住宅は大きく減少し、多くの住宅メーカーは金属屋根やスレート屋根を採用するようになった。一般住宅において当たり前だった瓦屋根は「敢えて」の選択肢となっていました。



施工と整然とした美しい瓦屋根

## 若手経営者塾への入塾

こうした瓦を巡る状況の変化を目の当たりにし、原田さんは次の行動に出た。「新しいことをしなければ

ならない。でも社内で議論していても、外に求めなければ新しいものは生まれない。」そう感じて、若手経営者塾への入塾を決意した。「飲み会でのディスカッションから受けたアドバイスが、今も新商品開発に活かしているんです。」講義後に開催していた懇親会が充実していたとの感想を語ってくれた。講義の中で最も印象に残っているのは、井上浄氏の「巻き込まれ力」。常にオープンな姿勢で、前向きに人と関わることの重要性を説いた言葉だが、原田さんは後述する新しいチャレンジにおいて「巻き込まれ力」を体現し、様々な運命的な繋がりを得て、事業を形にしてきた。

## 新しいチャレンジ

原田さんは今、2つの新規事業に取り組んでいる。1つ目は太陽光発電。庄内地区は風が強く塩害のある地域もあり、原田瓦工業の技術が活かせる。また、「自社でやったことがなければお客さまにも提案できない。」との考えのもと、かなり早くから自社発電に取り組み、パネルと蓄電池で会社の全電力を賄っているそうだ。

2つ目は昔き替えした瓦の再利用だ。廃材を砕き、様々な用途に応用する取組みである。保水・調湿効果がある瓦は汎用性が高い。ガーデンング等に使用する瓦チップや、エクステリア用のブロック、舗装材、珍しいものでは、廃瓦を外壁・内壁に吹き付けすること、独特な存在感を醸す建物の施工実績もある。更に最近では廃瓦をガラスとして再形成し、ガラスとして蘇らせるアイデアも製品化している。「瓦をゴミにしたいくないという想いは昔からありました。製品化してお客様に戻したい。」そんな志から次々と新しいプロダクトが生まれている。



写真奥 3種類のお客さまにも提案された瓦は、様々な製品として新たな命が吹き込まれる。

2つのチャレンジはあくまで本業である「瓦」に関連する事業だ。盤石な経営基盤を築き、本業から手の届く分野で社会貢献性の高い新事業を模索する。本業が順調に推移している今だからこそ新しい事業にチャレンジする。この点は当塾の講師・荒川昭正氏の講義内容にも通じる。堅実さの上に重ねたチャレンジ精神こそが原田瓦工業最大の強みになっていると感じた。取材を行っている最中、新たな受注の電話が鳴った。誠実に顧客メリットを考え、提案を行う原田さんの姿は、原田瓦工業の「風土」そのものだった。

株式会社 原田瓦工業

住所/酒田市広栄町1丁目6-1

電話/0234-31-3234

Mail/info@hrd-kwr.jp



つなぐ力で100年幸せな街づくり

鶴岡信用金庫

<https://www.tsuruoka-sk.jp/>